

味の素グループにおける社会貢献活動の現状と今後の課題



長谷川 公彦 (はせがわ きみひこ)
味の素株式会社
CSR推進本部CSR部 専任部長

味の素グループは、1909年に創業し、「食と健康」で世界の人々のより良い生活に貢献するという理念のもと、食品・アミノ酸・医薬品などの事業をグローバルに展開し、2004年度は、売上高1.07兆円、従業員総数約3万人という規模で活動中です。

1. 社会貢献活動の歴史

味の素グループにおける社会貢献活動は、その端緒を海外に見ることができます。1970年代、海外への事業展開に伴い現地法人を設立していく中で、自分たちが生産活動や販売活動を行う地域、社会への貢献を目的として、現地に社会貢献財団を設立しています。76年にタイ、79年にはインドネシアで財団が設立され、現在、5ヵ国で6財団が活動しています。

その後、社会貢献的な活動は個々に行われてきておりましたが、当グループの経営戦略としてスタートしたのは、97年に提示された経営基本戦略の中に「社会への貢献」というテーマが挙げられたことに始まります。その後、社会貢献専任チーム、委員会の設置等が行われ、グループ連結経営の推進の動きと軌を一にして、活動が開始されました。以降、新規プログラムの導入、活動の強化・見直しを経て、現在の活動

に至っています。

2. プログラム編成と特徴

当グループの現在の社会貢献活動は、グループ理念（図1）、活動ミッション（図2）、基本方針（図3）に基づいて、①グローバルな活動、②ローカルな活動、③財団による活動、④従業員活動の支援という4活動に整理しています（図4）。実際には、相互に関連し、重複する場面も出てきますが、活動主旨や主管により上記区分を採用しています。

グローバル活動は、グローバルな視点に立って、統一テーマのもとに取り組む活動と位置付けており、99年より「味の素『食と健康』国際協力ネットワーク（AIN）」活動を展開中です。これは、主として東南アジアや南米の開発途上

図1 味の素グループ理念

私たちは、地球的な視野にたち、
“食”と“健康”、
そして明日のよりよい生活に貢献します。

図2 社会貢献活動ミッション

私たち味の素グループは、社会における役割と責任を認識し、「食と健康」を中心とする社会貢献活動をグローバルに推進することにより、健康で活力ある社会の実現に努めます。

図3 社会貢献活動の基本方針

1. 目的を明確にして重点指向の活動を行います。
2. 味の素グループが持っている経営資源を有効に活用します。
3. 活動内容を適切に評価し、内外への情報の発信を積極的に行います。
4. 味の素グループの主体性を発揮し、従業員が実感できる活動を大切にします。
5. 外部の活動組織と連携を図り、活動のレベルアップを図ります。

図4 社会貢献活動 地域別／プログラム別マップ

・グローバルプログラム

味の素グループが統一テーマを掲げてグローバルに展開する活動

・ローカルプログラム

グループの各法人、事業所が、地域のニーズを踏まえ、地域ごとに行う活動

・財団による社会活動

味の素グループ関連の財団が、それぞれの運営綱領に基づいて行う活動

・従業員の社会活動

従業員が主体的に行う社会活動

		グローバルプログラム AIN	ローカルプログラム	財団による社会活動	従業員の社会活動
アジア	日本		食の教育／国際理解	食文化／教育支援	「AJINOMOTO GROUP CITIZENSHIP DAY」
	タイ		社会福祉／教育支援	社会福祉／教育支援	
	フィリピン	※栄養教育／栄養改善	地域交流		
	マレーシア		地域交流／社会福祉		
	インドネシア	※栄養改善／地域開発	環境保護／寄付活動	社会福祉／教育支援	
	シンガポール		地域交流		
	ベトナム	※農村開発	住宅建設／災害支援		
	カンボジア	栄養改善	教育支援		
	中国		チャリティーイベント		
	バングラデシュ	※栄養改善			
北米	米国		環境保護		
南米	ブラジル	※栄養改善		社会福祉／教育支援	
	ペルー	栄養改善	教育支援	研究開発支援	
欧州	EU		環境保護		
アフリカ	ナイジェリア		チャリティーイベント		

(注) ※現在支援中

国における、「食・栄養・保健」関連の課題解決を目的とした活動ですが、国内外のNPO・NGOや政府系機関、大学などと連携し、コミュニティが抱える課題を明確にし、協働活動を行い、その解決を図ろうという取り組みです。これまでに10のプロジェクトを終了させ、現在、新たに6のプロジェクト（図5）を進行させています。このAIN活動においては、内外の専門家で構成するアドバイザリー組織としてのAIN委員会を設置し、課題検証や有効な支援方法等に関して、アドバイスを頂き、活動の有効性や質の向上を図っています。活動においては、現地の社会事情や、課題解決に必要な専門性を有したNPO・NGOなどの外部組織との連携を基本としています。

また今年度から、新たなグローバルプログラムとして、「AJINOMOTO人と大地のプロジェクト」をスタートさせました。これは、CSR視点を踏まえた当グループの企業市民活動の一環として、「地球の食資源の持続性保全、資源循

環型社会の実現」を目指す活動で、「地球の食のあしたのために」というスローガンのもと、

- 1) 食資源の持続性の保全
- 2) “食”を育むコミュニティの自立、生活の向上
- 3) “食”に関する教育・啓発、“食・栄養・保健”を支える人材の育成

という3テーマを柱としています。第1弾のテストプロジェクトとして、インドネシア共和国スマトラ島の農村において、現地農業局との連携により、「キャッサバ＝アジアでの主要な食農資源」の収量向上のための栽培方法の普及活動を展開します。

ローカルな活動は、グループ企業、事業所、工場等において、関係する地域コミュニティとの交流を図り、その国や地域の社会ニーズを踏まえた貢献活動を行うものです。活動テーマは、地域のニーズにより「食・健康」「教育」「社会福祉」「環境」等、多岐に亘っています。ローカルな活動は、テーマコンセプト主導ではなく、

図5 2005年度新規支援事業

支援事業	実施団体	実施国	期間	支援金額（万円）
栄養改善のための養蜂事業	特定非営利活動法人 ハンガー・フリー・ワールド	バングラデシュ	1年	100
ベトナム北西部山岳地域住民参加型 農村開発	特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター	ベトナム	2年	400 (200/年)
妊婦及び5歳未満児とその親を対象 とした栄養・健康教育によるコミュニ ティを基盤とした障害予防事業	Community Based Rehabilitation Development and Training Center（現地非営利団体）	インドネシア	1年	100
インドネシアの村落における健康・ 栄養に関する知識及び行動改善のた めの能力開発	Department of Nutrition, Polytechnic of Health, Denpasar (現地非営利団体)	インドネシア	1年	100
栄養に関する知識と実践活動を通し た母子の健康改善	Global Action for Development Foundation, Inc. (現地非営利団体)	フィリピン	1年	100
エイズ児童の栄養欠乏症改善のため の強化食開発	Department of Nutrition in Public Health School, University of Sao Paulo（現地大学）	ブラジル	1年	100

あくまでその地域のお役に立つことを重視しており、地域社会から親しまれ、信頼される味の素グループとなるよう取り組んでいます。

財団活動は、現在、日本、タイ、インドネシア、ブラジル、ペルーの5カ国で、6財団が、それぞれの活動目的に基づいた特徴ある社会貢献活動を進めています。日本では、89年設立の味の素の素食の文化センターが、食文化の保護・育成、普及活動などに取り組んでいます。また味の素奨学会においても、従来までの奨学制度を充実強化し、新たに「食・栄養・保健」分野の海外留学生支援にも取り組み、“食”の将来を支える人材育成にも努めています。

従業員活動支援は、従業員の自主的な活動を奨励し、支援するというコンセプトで進めています。その一例として、全味の素グループをあげての企業市民活動キャンペーン「AJINOMOTO GROUP CITIZENSHIP DAY」があります。これは、毎年6～8月の期間中、従業員や家族が、主体的に社会とのコミュニケーション活動やボランティア活動を行うことを奨励するキャンペーンで、国内外の法人や、事業所、あるいは個人

の単位で、いろいろな社会活動が行われます。キャンペーン中の従業員の活動は全て、1冊の報告書にまとめられ、全従業員に報告されます。その他にもいくつか特徴のある活動を行っていますが、今後、グループ企業、事業所、財団等の活動組織間の連携、協力を一層推進し、当グループとしての活動を充実させていきたいと考えています。

3. CSRと社会貢献活動

本年4月に、コーポレート部門の中にCSR推進本部CSR部が新設され、社会貢献チームもこのCSR部に移りました。CSRという考えは、この数年で世界の大きな潮流となった観があり、日本の企業に対しても、経済的要素のみでない環境や社会的要素を加えた形での社会およびステークホルダーとの関係作り、向き合い方について、新たな対応を求めてきています。このような動向の中で、企業が行う社会貢献活動においても、活動内容や目標設定のあり方、企業活動の中での位置付け、そして何よりもその意義自体について再確認が必要となっています。私

たちの社会貢献活動は、企業の資源を投入する企業活動の一環であり、その意味では、単に一過性の慈善活動から脱却し、経営資源を活用して社会の課題解決を行っていくという、より積極的かつ戦略的な行動として考える必要があります。社会の抱える問題の原因を見据え、その解決を効果的に実現していくこと、さらにはその対象となる地域社会や住民が、自らの力でそのような取り組みを継続していくことができる活動スキームを構築することが大切となっています。また、企業の資源を使用することから、活動の目的、内容、費用対効果、目標達成度、企業価値への影響といった多くの面からの評価や説明が必要であり、自分たちの活動を冷静に評価し、より効果的な活動内容、運営方法を常に検討し、改善していくことも大切となります。現在の社会貢献活動には、このような視点に立って、戦略的で、かつ心の通った質の高い活動展開が求められていると考えます。

4. 今後の課題

味の素グループの社会貢献活動は、既述の通り、98年の専任チームの発足を契機に、グループとしての活動方針に基づいて進めてきました。2002年には、活動のあり方を再検討し、CSRの考え方に近い活動方針を策定し、「健全で活力ある社会」の実現に向けた企業資源の戦略的投資＝社会への投資、という考え方を明確にしました。活動においては、資源活用における説明責任の達成や、目標達成度の評価について、より厳格な内部運営を行う一方、志を同じ



野菜栽培の指導を受ける住民
(カンボジアでの家庭菜園普及事業)

くする外部の活動団体との連携を強化し、目標達成に向けたパートナーシップ、コラボレーション、アライアンスという協働活動を、実践活動を通して育んできました。

21世紀を迎えた私たちには、前世紀に「豊かさ」を求め人類が行った経済成長活動の結果として現出してきたさまざまな社会的問題・課題を、次世代に持ち込まないという大きな責任があり、世界が協力してその解決に挑戦することが求められています。21世紀を、豊かで活力に満ちた世紀にしていくことの責任と、企業が行う社会貢献の意義について考える時、これまで企業を育んできた地球、資源、社会の将来について真剣に考え、その持続的な発展と健康で活力ある社会の実現のために、企業が一役担う気概をもって取り組むことの必要性を感じます。

味の素グループの社会貢献活動は、まさにこのようなミッションを担う社会の一員としての活動でありたいと考えています。

JF
TC